

岩手県における繭糸質の実態解析

河端 常信

(岩手県蚕業試験場)

Analysis of Actual Condition of Cocoon Quality in Iwate Prefecture

Tsunenobu KAWABATA

(Iwate Sericultural Experiment Station)

1 ま え が き

最近の繭検定成績を調べてみると、岩手県の生糸量歩合成績は全国44都府県のうち、最下位附近を低迷しながら推移している。生糸量歩合は繭価格と密接な関係にあるところから、これの向上は急務を要し、普及現場から繭糸質の実態解析と改善技術の確立について強く要請されている。

それで繭質診断法について検討し、繭1粒当たりの生糸収率を求めて分析した結果について報告する。

2 繭質の診断法

繭1粒当たりの生糸収率は繭重×生糸量で表わした。生糸量歩合は一定生繭重量を基準にして、そこからえられる生糸量の重量割合であるので、単繭重の軽重と密接に関連する。生糸収率に繭掛目を乗ずれば農家の繭価に近い数値が算出されてくる。繭糸質の診断法としては適当なものが現在まで示されていないが、繭質診断の目標も農家経営の合理化、粗収入増加にあるので図1に示した診断図を案出した。即ち、横軸に生糸量歩合、縦軸に繭重をとり、単純

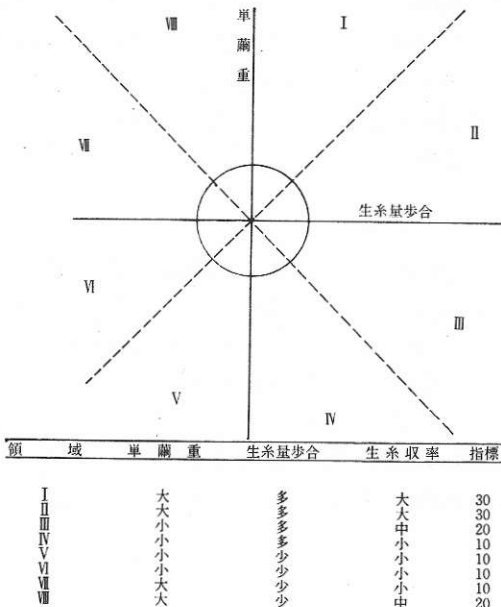


図1 繭質診断図

平均値を原点とした座標を作製し、原点を通り、横軸に45°及び135°で斜線を引くと図上の4線によってIからVIIIまでの8つの領域に区分される。この図内に数値を表示すると中心部付近に位置するものは平均的な成績を示すものであるが、中心部から離れて位置するものが各々の領域における繭質の特性を示すといえる。この診断図上の領域の特性は図1の表に示すとおりである。この診断図を基準にして繭質の実態解析を試みた。

3 調査結果

(1) 地域別・蚕期別にみた繭糸質の特性

昭和46~53年の8年間における全国・東北・岩手の平均繭重、生糸量歩合を示したのが図2である。春蚕繭では全国に比べ東北および岩手では年次別格差が大きく、しかも低位に位置している。生糸収率を算出してみると、全国0.374%、東北0.367%、岩手0.353%であり、岩手は全国

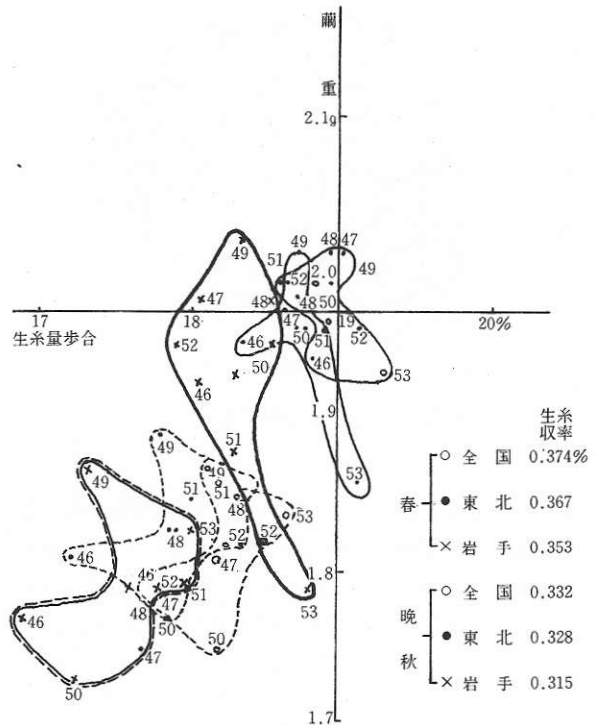


図2 全国・東北・岩手の平均繭重・生糸量歩合・生糸収率(46~53年)

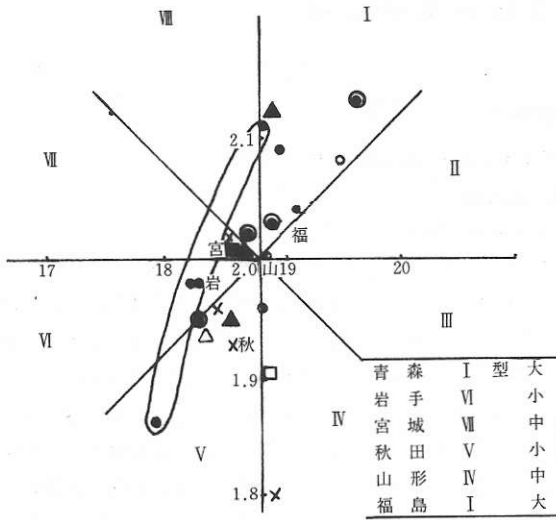


図3 東北各地域の繭質診断図

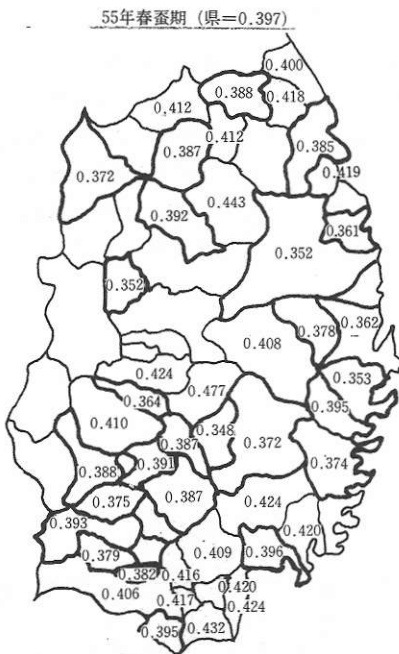


図4 市町村別の生糸収率(55・春)

に比べて6%,東北に比べても4%生糸収率が劣った。晩秋蚕繭についても春蚕繭と同一傾向が認められるが、岩手では繭重は全国・東北に比べて差は少ないが、生糸量歩合の低いことが生糸収率を低くする原因となっている。

次に昭和55年における東北6県の蚕期別の繭質診断を図3に示した。各県とも春>初秋>晩秋の順に繭重・生糸量歩合は良好であった。3蚕期の平均でみると青森・福島はI型に属して生糸収率は高く、山形・宮城は平均値に近く中位であるが、岩手・秋田はV・VI型に属して劣った。とくに岩手では晩秋蚕繭の生糸収率が低く、異常冷夏の影響が大きいことを示しているものと思われる。

55年春蚕繭について岩手県の市町村別にみた生糸収率を図4に示した。県平均の生糸収率より低い地域は、沿岸部から北上山地及び胆江平野を中心とした内陸部であった。初秋は北部地域の山間部及び遠野盆地の北上山地が低く、晩秋では北部山間地から北上山地及び胆江平野の内陸部が劣った。この結果を繭質診断図にあてはめて評点を算出してみてもよく一致した。

(2) 年次別にみた繭糸質の特性

昭和33年から55年にかけての23年間の岩手県における繭質診断を蚕期別に行った。春蚕繭の場合でみると30年代には繭重は重いが生糸量歩合は低く、40年代には繭重は中間値であるが生糸量歩合が向上し、50年代には55年を除くと繭重の軽量化が目立っている。とくに最近では生糸収率は低下の傾向がみられる。初・晩秋蚕繭では繭重は大差ないが生糸量歩合は年次を追って高くなる傾向を示し、生糸収率は50年代では上昇してきている。これらの原因については多回育に伴う桑収穫法の変遷、育蚕技術の変化が関与していると考えられる。

(3) 蚕品種別にみた繭質の特性

春蚕用4品種について5年間の成績を診断図で検討した。その結果、千春×万花、春月×宝鐘は評点22~24と高いが大平×長安、陽光×麗玉は12~14点と劣った。評点の低い両品種は年次ごとの格差が大きく、とくに繭重が軽くなるので、育蚕技術の改善もこの点におく必要があろう。

4 ま と め

繭重と生糸量歩合を座標とした繭質診断図を作製し、生糸収率の両面から岩手県の繭糸質を解析した。岩手県の繭質は生糸収率が低く、とくに蚕期別の格差が大きかった。春では繭重が軽く、初・晩秋蚕繭では年次ごとに生糸量歩合は向上しているが、地域別に見て下閉伊・北部山間地・内陸部の繭質が劣った。なお繭質診断図によって地域別・蚕品種別等の繭質良否の判定に応用が可能と思われる。